
慈 恵



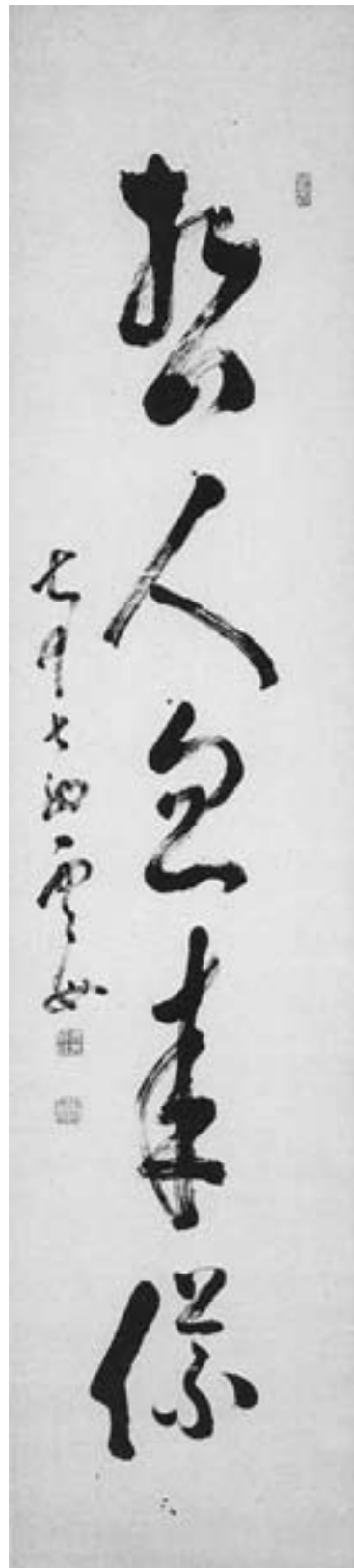
平成28年 春季号

No.54

宗教法人 慈 恵 院

付属 多摩犬猫霊園

鑑賞



哲人^{なま}忽ち来たり儀^ぎす

七十七 衲雲母

すでに、どこにも厳しさや鋭さはなく、
円くなった錐^{きり}。『閑古錐^{かんこすい}』とは、このこと
だろうか。

それでいて「哲人が徳に感じ、すみやかにやって来て、儀容を正している」という語意のように、気品と落ち着きとを有す。これに接した客人は、わがことかと思ひ、悪い気はしまい。

滴水老師は、七十八歳の正月二十日に遷化されたので、この辺が最晩年作と言えよう。

「禅画報」より

竹の子に床板をはずす

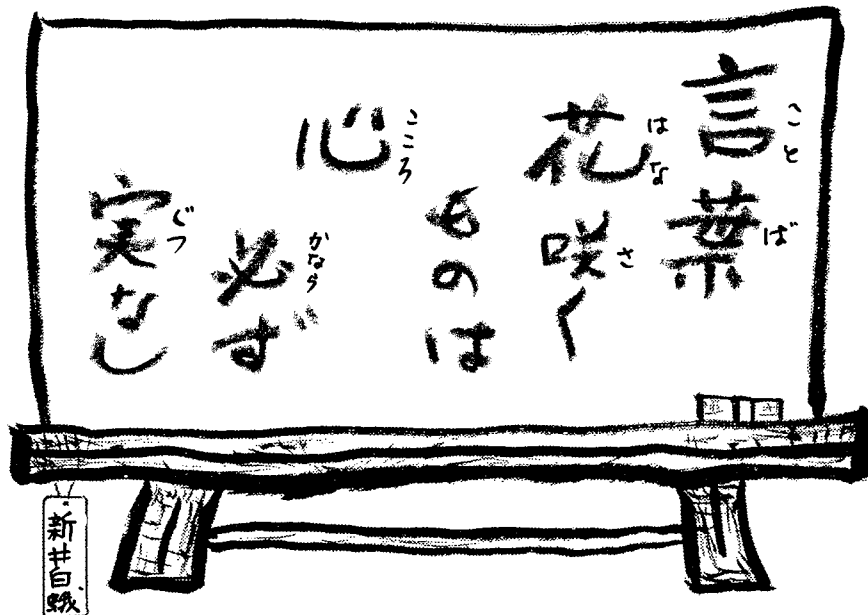
良寛は竹が好きだった。ある年のこと、庵の床下の地面に一本の竹の子が芽を出し、すくすくと育って床板に届くようになった。それを見つけた良寛は、すぐに床板を外して、成長していく竹の子を楽しんで見守っていた。やがてそれが天井を突くまでに伸びると、今度は天井板を破り、屋根まで壊して竹の成長を妨げないようにしてやった。雨が漏っても平気なものである。雪が吹き込む季節を迎えても、それを風流と受けとめて、庵に坐しながら、「大きくなった、大きくなった」と竹を愛で、夜には星をあおいで暮らしたという。

「禅門逸話集成」より

良寛 りょうかん
(一七五八〜一八三二)

江戸後期の禅僧・歌人。俗名山本栄蔵、号は大愚。越後の人。諸国を行脚の後、帰郷して国上山の五合庵に住。性恬淡、村童を友とし、高潔の人格を敬仰された。書を以て知られ、また漢詩・和歌にすぐれた。弟子貞心尼編の歌集「蓮の露」などがある。

掲示板





大好きなチエルシー

ありがとう

草加市 根本 果林(24)

愛犬チエルシーが我が家に来たのは丁度十四年前、まだ私が小学校五年生だった頃。母姉とペットシヨップで一目惚れし、我が家の家族となりました。家中をぴよんぴよん飛び回り、まるで「狭いペットシヨップのゲージは窮屈だったよ」と言わんばかりの元気の良い雌犬のシェルティー。ボール投げとフリスビーが大好きで、夏は扇風機、冬はストーブの前を陣取る姿は人間顔負けでした。とにかく食い意地が張っていて、私達がご飯を食べていると、つんつんと鼻で足を突き、いつもちょ

うだいとおねだりをするおでぶちゃん。散歩に行っては他の犬とすれ違うのが怖くてびくびくしているのに、いざ通りすぎると後ろに振り返ってワンワン吠える臆病なチエルシー。今思うとそんな当たり前の日常が私達家族には、かけがえのない日々でした。

チエルシーの様子がおかしいなと思いはじめたのは今年の春辺りから。後ろ足が思ったように動かないのか、あまり散歩にも行きたがらず、外に出す時は抱えて出すようになり、「これも年のせいだね、太っているから体を支えられないのかな」と心配はしていたものの、病気だなんて考えは少しもありませんでした。

七月に入って時々、クンクンと鳴くようになり、おしっこがしたいのか、それとも足が思うように動かなくてもどかしいのか、早く良くなつてまた元気にお散歩に行けるようにと願う毎日でした。

チエルシーの容態が急変し

たのは七月八日。仕事終わりに携帯を見ると母から、「チエル危篤だよ」と。まさかそんなはずとは思いつつも、いざこれこうなる時が来ることを覚悟していた自分もいたと思います。病院帰りの母とチエルを待ち、車を開けるとぐったり横たわったチエルシーの姿が。検査をしてもらった結果、腎臓、膀胱、肝臓が悪いと分かりました。あのクンクン鳴いていたのはおしっこがしたいからではなく、痛かったんだと後から分かり、今思えば後悔するばかりです。翌日は昨日の注射が効いたのか、昼間はよく寝ていましたが、夜中にまたクンクンと二時間置きに鳴き、その度に父と母が看病をしてくれました。

そして十日、私が早めに帰宅しチエルの看病をしていましたが、息がしずらいのか、げえげえした感じで、胆液、胃液を吐きながらとても苦しそうな姿を見ているのが本当に本心に辛かったです。でも

一番辛かったのはチエルシーだね。その日、かかりつけの病院はお休みでしたが、鼻血も出ていた為にもたつてもいられず、すぐに電話をし病院へ連れていきました。注射はしてもらったものの、先生からは、この前に来た時より更に状態が悪化しているねと言われました。先生の表情とチエルシーの今の状態を見て、もうきつと長くないのだろう……と頭のどこかでは分かっていたのかもしれませんが。病院で点滴をすることもできしましたが、良くなる保証はないし、このまま病院で……なんて事になったら絶対後悔するだろうと思い、一旦自宅へ連れて帰る事にしました。

家に帰っても容態は良くなるどころか、どんどん息苦しうになるばかりで、十一日の〇時三十分頃、チエルシーは天国へと旅立っていきましました。息を引き取る最後、歯をくいしばり、もがき苦しむ姿が今でも頭から離れません。

本当によく頑張ったね。家族全員で最後を看取れて、チエルシーも安心して旅立つ事ができたのかな？チエルシーと過ごした十四年間は長いようで、でも今思い返せば本当にあつという間の日々でした。チエルシーは私が辛い時、悲しい時、嬉しい時、楽しい時、いつも側にいてくれた妹のような存在です。チエルシー、根本家に沢山の笑顔と幸せを本当にありがとう。チエルシーと過ごした十四年間は私にとってかけがえない宝物です。チエルシーがいらない毎日は寂しいけれど、私達家族がいつまでも悲しんでいたら天国にいるチエルシーも心配してしまうと思います。チエルシーの分まで幸せに、そして強く生きていきたいです。

ガビと二人三脚

三鷹市 藤田 隆子

暑さにうだつてストレッツから戻ると、まるで待って

たように、長い尻尾をピンと立ててダイニングに入る。常時エアコンを二十八度に保って、彼女が一人でも涼しいようにしてたのに、鍵の音でトコトコ迎えに出るガビ。その彼女もすでに十二年の、立派なレディに生成した。

生まれたその日に捨てられて、兄妹達は次々に旅立つて行ったのに、弱そうに見えた彼女の目が明き、一步又一步とあるき始めてから、今日迄元気に暮らして、私の相棒で暮らしている。今夜もこの椅子の下でじつとしている。

ミモザおばさんが旅立った時、歩き始めて半年。婆ちゃん達が泣いたのも知らなかった。

小太郎爺ちゃんが死んだ時は、ちようど九才の時、「ジケイイン」のお兄さんの大きなかごで運ばれて行った時は、婆ちゃんの椅子にうずくまって見送った。

ガビが一人になった時だった。そのガビも動く物体でしかなかったのに、今では立派な器量よしの大人となった。避妊

手術をしているので、淋しさもなく、毎日黙々と生きている。朝、昼、晩とも婆ちゃんと同じ時間にごはんを食べる。

ベランダの戸を開けると、網戸に鼻をつけて、風のおいをいっぱいかいでいる。

婆ちゃんの下から出たり、入ったりして、婆ちゃんにだっこする。爪を切られるのが嫌いなので、時々いじわるをする。

婆ちゃんが病院に行つての間は、ちよつと淋しいが、残ったごはんを食べたり、その日のウンチも済ませる。そしてせいせいして婆ちゃんを待つ。鍵の音で玄関に急ぐ。

「ガビちゃん、バアちゃんよー」良かった、もう淋しくない。私とガビの二人三脚の生活は続くことでしょう。婆ちゃん、当年七十七才。がんばろう。

ナナちゃんへ

西 敏子

ナナちゃんが天国に旅立つ

てしまった日のことを思うと今でも悲しくて辛くてたえられなくなります。

泣いて泣いて泣いてやつと九年がたちました。

ずっといつしよに居たかったです。四十年も五十年も六十年も。でも命の時間は短いすね。かわいいかわいい大切な命。とっても美人さんで皆から「かわいいね。かわいいね」とほめられました。自慢の娘でした。

ナナちゃんに出会えて家族になつてママは本当に本当に幸せでした。

天国で皆といつしよで幸せですか。淋しくないですか。ママはずっとずっとあなたを思っています。世界一大切なママの宝物です。

一生分ありがとう。又どこかでママの子供に生まれてきて下さいね。ずっと愛しています。